

シニアネットワーク連絡会セッション

夢に挑戦する人材育成

Fostering human resources with challenging spirit to Dreams

(1) 若者に夢を与える教育について

(1) Education for giving dreams to young generation

*高妻 孝光

茨城大学大学院 理工学研究科 量子線科学専攻

この10年間に於いて、最も発展し、社会に浸透してきたものの一つにインターネットがある。電子メール、WEB、SNS等、広く利用され、いろいろな局面で活用されている。レストランの情報検索等ごく当たり前であり、インターネットの技術を抜きに生活を語るとは、もはや難しい。データ(情報)の獲得、蓄積、共有は、近代科学においては極めて重要な要素であり、ドイツのバイルシュタイン(今や、知る人ぞ知るにはなっているが、古参の化学データベースである)、アメリカ化学会のChemical Abstract、そして、原子力関係にも多くのデータベースが存在し、たちどころに研究情報を手に入れることができるようになってきた。これらの情報資源とその活用は、科学技術の量産速度をあげることに貢献しているが、必ずしも、質的向上には大きく寄与しているとは見るべきではない。多量の情報のフォローとその整理という作業から、クリエイティブなものを生み出すことは、なかなかできない。

多量の情報を簡便に利用できる現代の環境は、若者(ここでは、年齢という意味ではなく、初学者という意味で用いている)にとって、積極的選択ではなく、消去法による選択となっていることが多い。要するに、あまりにも膨大な選択肢があり、なにをするかではなく、なにをしないかということに価値観がシフトしているのである。しかし、夢とは、積極的選択による目標であり、アプローチである。ましてや変化を伴うものである。消去法的選択では当然のことながら、夢を描くことは難しい。積極的選択を生み出すには、やはり直接的体感の場を提供するしかない。

そのような時代だからこそ取り組むべき課題が浮き彫りとなる。日本は、インターネットを通じた世界では、グローバルメンバーではあるが、一度、外に出るといかにガラパゴス化が進行しているかがよくわかる。若者に夢を描き、その夢の実現に向かうためには、文化的背景の異なる多くの海外研究機関との連携が必須である。日本でできるからとか、日本の方が優れているからということではなく、若者が海外の研究環境をいかに体感することがきわめて重要である。そのような環境においてFace-to-Faceでコミュニケーションすることは、まさに夢を獲得する舞台となる。

海外の環境への曝露のみならず、国内においても、いかにヘテロな環境におく機会を与えるかであろう。大学の研究室に閉ざすことなく、いろいろな研究環境に若者を送り出す努力をもっとしてもいいのだと思う。

最後に、夢というものを伝えるためには、歴史観が必要であり、科学技術に携わるものは等しく描いた先達の系譜に連なっていることを知るといことも重要であり、シニアの果たす役割として大きなものではないだろうか。

*Takamitsu Kohzuma¹Ibaraki University